

【論文提出者】 社会文化科学教育部 人間・社会科学専攻 先端論理学領域
氏名 井上 祥明

【論文題目】 戦後日本における保健医療へのソーシャルワークの導入と展開

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

井上祥明氏の博士学位申請論文「戦後日本における保健医療へのソーシャルワークの導入と展開」は、社会福祉の実践であるはずのソーシャルワークが、保健医療領域では医療機関、特に病院の利害に従属し、その「道具」と化しているという現状認識に基づき、そうさせている仕組みを保健医療におけるソーシャルワークの制度化の端緒にまで遡って解明する試みの一部である。保健医療領域へのソーシャルワークの制度的な導入は、戦後、GHQの主導によって始まった。本論文では、導入開始当初から1950年代にかけて保健医療領域で実践されたソーシャルワークとその制度的環境が検討される。

本論文の構成は、以下の通りである。第1章、第2章では、戦後、どのようなソーシャルワークが保健医療領域に導入されたのかが、主としてソーシャルワーカーの養成に注目して検討される。氏は、日米の社会福祉の専門家が、部分的に見解を異にしつつも、共にソーシャルワークの対象者の「パーソナリティの発達」を重視していたことを指摘する。続く第3章では、当時、保健医療領域においては主に保健所にソーシャルワークが導入されたことをふまえて、保健所における実践が検討される。ソーシャルワーカーは対象者の「パーソナリティの発達」を重視していたこと、しかし保健所のソーシャルワークではそのことの業務上の優先順位は低くこれを実施できないケースも少なからずあったことを、氏は指摘する。

本論文の後半、第4章から第6章では、1950年代に保健所で実践されたソーシャルワークが検討される。この時期の保健所ソーシャルワークに関しては、従来「衰退」が指摘されてきた。しかし氏は、ソーシャルワークの実施件数の減少を認めつつ、同時に実践の内容の質的変容に注目すべきことを主張する。氏によると、ソーシャルワーカーは、「社会調査」と「社会診断」に基づく「社会治療」、すなわち対象者の心理・環境を綿密に調査・分析しその結果をふまえて対象者の環境を調整しつつ「パーソナリティの発達」を促すよう働きかけることをあるべきソーシャルワークと考えており、実際、当初はこれがある程度実践されていた。しかし徐々に「社会調査」と「社会診断」が行われなくなり、最小限の調査・分析に基づく環境の調整、つまり「社会治療」だけが実施されるようになっていった。こうした変化は政策的に推進されたが、結果として保健所における実践は、対象者の「パーソナリティの発達」を促すというソーシャルワーカーのめざす内容からますます遠ざかることとなった。

本論文は、戦後から1950年代の保健医療領域におけるソーシャルワークとその制度的環境を、広範な資料を渉猟し実証的に描いており、高く評価できる。社会学・社会福祉学を見渡しても、この時期の保健医療領域におけるソーシャルワークに関する研究は少なく、本論文ほど広範に資料を収集・分析したものは見当たらない。とはいえ問題も残されている。保健医療領域におけるソーシャルワークの現状を問題視しながら1960年代以後の展開に関して十分な展望を示せなかったことは残念であ

る。ただしこの点は、本論文を大きな研究プロジェクトの一部として位置付け、現状に至る経緯の解明を今後の課題と考えるなら、大きな瑕疵とはいえない。むしろ着実に研究を進める氏の研究能力を評価すべきである。

以上の検討から、本論文を博士論文として適格であると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、令和6年1月17日（水）（13時から14時まで）に、学位論文審査委員会委員4名の出席のもとで、対面にて実施された。まず本人から、学位論文の概要の説明がなされた後、各審査委員との間で質疑応答が行われた。氏は、いずれの審査委員の質疑やコメントに対しても、専門的な学識とこれまでの考察に基づいて適切に応答をした。

また、令和6年1月24日（水）（18時から19時10分まで）にZoomで開催された学位論文公開発表会においては、最初に博士学位論文の要旨に基づいて説明が行われ、その後参加者との間で質疑が行われた。参加者からの質疑に対して、適切かつ明快な応答がなされた。

以上から井上祥明氏は、当該研究テーマ及び関連領域に関して優れた学識を有し、自立して研究を行う能力を十分に有すると確認された。そこで審査委員会は、同氏に対して博士（学術）の学位を授与するに相応しいと判定した。

【審査委員会】

主査 中川 輝彦
委員 田仲 朋弘
委員 牧野 厚史
委員 吉武 由彩